

丹波国府を求めて

日本の行政区の原形は飛鳥時代に遡ります。古代国家は60余りの国とその管下に郡（評）・郷に分かれており、土地と人々を統一的に支配していました。60余りの国には中央から役人が赴任しますが、実際には地方を治めていた豪族が郡司に任命され、実務をおこなっていました。京都府内での古代の国は、丹波・丹後・山城国で、各国には国府と呼ばれる地方行政機関が設置されました。国府には、国司が政務を執り儀式をおこなう国庁とそれに付随する館、正倉しょうそうなどの建物が、都の中央政庁である朝堂院を真似て整然と建てられていました。しかし10世紀以降には、儀式の場が簡略化され、実務的な政務の場へと変化していきます。

もともと丹後・丹波の両国は一つの国でしたが、和銅6（713）年に丹後国が丹波国から分割されました。その結果、丹波国は桑田・船井・何鹿・多紀・氷上・天田の各郡が丹波国に属することとなり、現在の京都府中部から兵庫県篠山地方、大阪府能勢の一部までを含んでいました。

では、丹波国の中心、丹波国府はどこにあったのでしょうか。実は、現在でも丹波国府と特定できた遺跡はありません。

国府の場所を検討する場合、いくつかの条件が想定できます。国府は地方行政の中心地であることから、都と行き来がし易い街道沿いにあったと推定されます。また、中央政庁を模した建物群で



池尻遺跡の大型建物跡

真南北を意識した大型建物群が広範囲にあり、その中に正殿と想定される建物や執務をおこなう脇殿、税を貯える倉庫群が存在し、儀礼をおこなうための広場の存在が国府の必要条件と推定されます。また、租税の



千代川遺跡遠景

記載や都との連絡のために用いられた墨・筆・硯などの筆記具、文字が記された紙や板（木簡^{もっかん}）、字が書かれた土器（墨書土器^{ぼくしよどき}）、都から赴任した貴族が使用する高級な器（緑釉陶器^{りよくゆうとうき}・灰釉陶器^{かいゆうとうき}・外国製陶磁器^{とうじき}など）といった遺物が出土する遺跡が国府の可能性が高い遺跡として考えられます。

これらの条件をあてはめて、丹波国府の可能性が高い遺跡を検討していくと、時代とともに国府が移動していたことが次のとおりに推定できます。

奈良時代前半の国府は、周囲が堀に囲まれた敷地内に大型建物が整然と建ち並ぶ亀岡市馬路町池尻^{いけじり}遺跡が有力な候補地としてあげられます。同じ亀岡市千代川町千代川遺跡では、大型の建物や区画施設は見つかっていませんが、調査で数多くの墨書土器や緑釉陶器・灰釉陶器などが見つかっています。奈良時代後半から平安時代前半にはこの地に国府が移動したのかもしれませんが。平安時代後期から鎌倉時代の国府は、具体的な遺跡は特定できませんが、現在の南丹市八木町屋賀^{やが}にあった可能性が、承安4（1174）年の年紀のある「丹波国吉富庄絵図^{たんばのくによしとみしょうえず}」から見て取れます。

以上のように、丹波国府の位置は未だ確定できていませんが、今後の発掘調査や様々な研究に期待が寄せられています。

（石崎善久）